OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	土族のゲセル
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 18, p. 225-250
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

土族のゲセル

角　道　正　佳

Monguor Geser

KAKUDO Masayoshi

Twenty motifs of the Monguor Geser versions are compared with Tibetan, Mongolian, Oirat, Burushaski, Stak versions and sixteen motifs are compared with Shera Yögur, Haixi Mongolian versions in order to characterize the Monguor versions.

The second chapter of Tianzhu Monguor version contains the motif of 'Black Horse' and the fifth chapter has a precise description of Monguor wedding ceremony. The proposal of 'Frog' and the motif of 'Falth Suns' are reflected in *Geser rëdzia－uu* and Monguor nursery rhyme 'The bee with sheep body' is borrowed to show the feature of *San sdzialuo* (Father of Geser's first wife).

0．はじめに

ゲセル（あるいはケサル）はガンジス川からアムール川に至る広範な地域に広がっている英雄叙事詩である(1)。とりわけモンゴル系のもの及びチベット系のものについては古くから注目され研究されている。しかし土族のゲセルについては、最初の記録はすでに1948年になされ、1980年には手書きの資料が出版されているにもかかわらず、それ自体の研究はおろか、モンゴル・チベットとの関係についてもほとんど言及されることはなかった(2)。1992年に漢語ではあるが、土族のゲセルの短い断片が公刊され、1996年に天祝土族のゲセルの前半が出版された。本校の目的はこれら土族のゲセルの内容をモンゴル・チベットのゲセル（ケサル）と比較し、その性格を位置づけることにある。しかしモンゴルとチベットに限定していたのでは、重要な観点を見落とすおそれがあるので、ブルシャスキー、スタック等の版にも言及し、各モチーフがどのようになっているかを検討した。また、土族に近い所に居住している裕固族、海西蒙古族のゲセルとも比較した。

1．利用するテキスト

ゲセルには非常に多くの版があるため、その全てを利用することはできない。本校で利用した

ものを以下に述べる。

現在利用できる土族のゲセルのバージョンには、年代順に次の三種類がある。Heissig, Walther(1980) *Geser rëdzia－wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tu－jen)－Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.［GRと略す］、朱剛、席元麟、星全成、馬学義、馬路、循集辯編（1992）『土族撒拉族民間故事選』中国少数民族民間文学叢書・故事大系　上海文藝出版社、上海の「格斯爾」49－55［土族格薩爾と略す］、甘粛省《格薩爾》工作領導小組辦公室、西北民族学院《格薩爾》研究所編纂（1996）『格薩爾文庫』第三巻　甘粛民族出版社［天祝と略す］。［GR］はハルチゴル方言とナリンゴル方言の中間の方言話者グァンボ・シジャからシュレーダーが収録したものであり、［土族格薩爾］は青海互助、甘粛天祝等に流伝しているものを王殿が捜集整理したものであり、［天祝］は青海省恰溝生まれで現在は朱岔郷の狭口村に住んでいる王永福が語ったものを息子の王国明が記録したものである(3)。

モンゴルのゲセルとしては、和訳のある若松寛（1993）『ゲセル・ハーン物語　モンゴル英雄叙事詩』東洋文庫566　平凡社［蒙古と略す］を利用する。またオイラートのゲセルとして、Angčinküü, Sečenmöngke čoγlaγuljǔ emkedgebe(1984) *Oyirad geser ün tuγuǰi*, Öbür mongγol un soyol un keblel ün qoriya（安柯欽夫、斯琴孟和採集整理（1984）『衛拉特格斯爾傳』内蒙古文化出版社出版、内蒙古海拉爾新華印刷廠印刷、呼倫貝爾盟新華書店発行）［オイラートと略す］を利用する。

チベットのケサルに関しては、君島久子（1987）『ケサル大王物語　幻のチベット英雄伝』世界の英雄伝説9　築摩書房［貴徳と略す］を中心に参照し、必要に応じて、金子英一（1987）「ケサル叙事詩」長野泰彦、立川武蔵編『北村甫教授退官記念論文集　チベットの言語と文化』冬樹社408－427、加藤千代訳・解説（1972）「リン・ケサール王物語　ホル・コクシ王との戦いの巻」『中國』第109号（1972年11月号）48－61、山口瑞鳳（1987）『チベット』上　東洋叢書3　東京大学出版会の「叙事詩ケサル」287－263、ハイド＝チェンバース、フレデリック＆オードリー編、中島健訳（1996）『チベットの民話』青土社の「リンのゲサル」55－118［カムと略す］を参照する。

ブルシャスキー版として、Loriner, D. L. R.（1935）*The Burushaski Language*, Vol. II Texts and Translations, Instituttet for sammenlignende kulturforsking, H. Aschenoug & Co.（W. Nygaard)Oslo. のNo. Ⅳ. The Adventure of Kiser, pp.101－179［ブルと略す］。

スタック版として、Sönen, Renate(1981) 'On the Stak Version of the Kesar Epic in Baltistan (An annotated summery of the first chapter),' *Zentralasiatische Studien der Seminars für Sprach－ und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 15, Kommissionsverlag Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 491－511［スタックと略す］を利用する。

土族に近いものとして次のものを利用する。保朝魯、賈拉森編（1988）『東部裕固語話語材料』

蒙古語族語言方言研究叢書018、内蒙古人民出版社の故事「碩勒梯子」117－123［東部裕固と略す］、郝蘇民編（1987）『東郷族保安族裕固族民間故事選』中国少数民族民間文学叢書・故事大系　上海文藝出版社の「格薩爾的故事」270－280［裕固１と略す］、及び「格斯爾的出世和智娶公主」281－290［裕固２と略す］、査干哈達記録、整理（1986）「格斯爾伝」海西蒙古語話語材料『民族語文』一九八六年第二期（総第三十八期）70－80［海青蒙古と略す］。

２．土族のゲセルと他のゲセルとの関係

［蒙古］、［オイラート］、［ＧＲ］、［天祝］、［貴徳］、［プル］の関係を図示すると次のようになる。ただし［ＧＲ］と［プル］は章に分かれていないので、話の中心の舞台がどこであるかによって仮に以下に示すように分け名前を付けた。［ＧＲ］は最後の部分が約３分の１欠如している。また［天祝］は現在前半の部分しか出版されていない。①、②、③はそれぞれ第一夫人、第二夫人、第三夫人をいつめとったかを表している(4)。［蒙古］、［オイラート］の部分はチョイロルジャブ著、若松寛訳（1988：90）に基づいた。モンゴル版のさらに詳しい対照は田中克彦（1963）を参照のこと。

<table>
<tr><th>［蒙古］</th><th>［オイラート］</th><th>［ＧＲ］</th><th>［天祝］</th><th>［貴徳］</th><th>［プル］</th></tr>
<tr><td></td><td></td><td>リンの誕生
・滅亡</td><td>第一章</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>第二章</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="3">降誕　I</td><td rowspan="3">I，II</td><td>神国</td><td>第三章</td><td>I 天界にて</td><td rowspan="4">ラマ国
①</td></tr>
<tr><td>転生</td><td>第四章</td><td rowspan="2">II 地上での転生</td></tr>
<tr><td>サン国　①</td><td>第五章 ①②</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>第六章</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>リン国</td><td></td><td>III ケサル大王の誕生</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>シン国　②</td><td></td><td></td><td rowspan="2">ハイハイ国
②</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>ンゼマ国 ③</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>黒斑の虎　II</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>漢土　III</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>十二面魔王　IV</td><td>III</td><td>悪魔国</td><td></td><td>IV 悪魔退治</td><td></td></tr>
<tr><td>シャライゴル　V</td><td>IV</td><td>ホル国
（後半欠）</td><td></td><td>V ホルとの戦い</td><td>ホル国</td></tr>
<tr><td>ラ　マ　VI
地　獄　VII
復　活　VIII
アンドルマ　IX
ロブサガ妖怪　X
ゴンボ汗　XI
ナチン汗　XII</td><td>VII

V
VI</td><td colspan="4"></td></tr>
</table>

3．ゲセル、主要項目比較

以下［GR］と［天祝］の数字は行番号、それ以外の数字はページ数を表す。土族のゲセルとチベットのケサルが近い関係にあると言えるのは、次の3．4，3．7，3．9である。なおSöhnen（1981: 508－509）にはブルシャスキー、スタック、バルティ（カプル）、ラダッキの各版のモチーフ分析があり、鈴木道子（1982: 31－40）にはブルシャスキー、ラダッキを含む六つの版のモチーフ分析がある。

3．1．ゲセルは天界の何番目の息子か

［蒙古: 13］、［GR: 2188－2190］、［天祝: 2578］、［貴徳: 15］では三人息子の末っ子となっていて、これが最も普通の描写であるが、［オイラート: 5－6］では七人息子の三番目、［スタック: 494］では七人息子の末っ子となっている。非常に変わったものとしては、［ブル: 111］の双子の兄というのがある。三と七という数字に関連して［GR: 2287－2288］の「三年後に来る人は七年経った」というくだりは興味深い。

3．2．ゲセル転生のための下界への偵察

［蒙古］、［オイラート］、［ブル］では語られていない。［GR: 2638－3062］では、フクロウ、烏、斑のカササギ、カッコウ、オオハクチョウ等に変身して下界を見に行く、［貴徳: 16－18］では鳥に変身して様子を見に行く、［天祝: 2918－2932］では姉が鷹に変身して下界を見に行くことになっている。

3．3．ゲセルの母の素性(5)

［蒙古: 14］ではフー・バインの娘ゲクシェ・アムルジル、［オイラート: 3］ではアムルゾル、［GR: 3024－3025］ではリンのシュドンバ・シジャランにいる老婆マンケグザ、［天祝: 1090, 1132］では里域王の三女マン・ガク・シュザル・ジョルマー、［貴徳: 20－21］ではリン国の王タチャの長男ソルタンルチェの第一夫人カツァラモ、［ブル: 109］ではアバ・ドゥンブ(6)の妻、［スタック: 495］ではアバ・ドゥンバたちが戦って殺した敵の妻マーメ・ゴクザと語られている。

3．4．ゲセルの母の懐妊

［蒙古］、［オイラート］、［貴徳］では語られていないが、［GR: 3261－3304］では、お婆さんが鳩を食べる、太陽光線が体の上に降りる夢を見る、［天祝: 2976］では鳩を食べる、［ブル：107, 109］では器の中に降り注いだ雨をアバ・ドゥンバの妻が飲む、［スタック: 405］ではケサルとフラゴ・ブルンモを焼いた灰が解けた水をマーメ・ゴグザが飲むと語られている。

3．5．ゲセルの容貌

［蒙古: 18］では、右眼を睨み、左眼を見張り、右手を挙げ、左掌を握り締め、右足を挙げ、左足を伸ばし四十五本の真っ白な歯を噛み締めていた。［オイラート: 9］では、右目を開け、左目を閉じ、右手を握り、左手を広げ、右足を踏み、左足を伸ばし、四十五本の真っ白い歯を噛みしめていた。とほぼ同じことが生まれたときの様子として語られている。［裕固1：272］で

は、生まれつき見るからにたくましそう、顔は銅のようで、鼻はまっすぐ、耳は四角、とやはり生まれたときの様子が語られている。これに対し、［ブル：155, 157, 159］では、短い足、細い腰、広い背中、一本の歯が青い、猫の目、狭い額、大きい頭と、その容貌が語られている(7)。［ＧＲ］、［天祝］、［貴徳］にはゲセルの容貌に関する描写はない。

３．６．庇護者(8)

［蒙古：13］、［オイラート：7］では三人の姉、［ＧＲ：3257］ではチョン・チョン・タリ・ワシュガ（姉）、［天祝：2766］では姉、［貴徳：48］ではコンメンチュモ（おば）である。［ブル］には該当する人はいない。

３．７．ゲセルへのアカ・チドンの財産分け

ゲセルは叔父からすぐには役立たないが、なくては困るものをもらう。［蒙古］、［オイラート］、［天祝］にはこういうくだりはないが、各版で次のようなものをもらう。［ＧＲ：6211－6673］では天、太陽、月、大地、煙穴、ルジャウ・リルガンの山頂にある柴、空の橋、［貴徳：39］では草地、シェマ海、丸木橋、［ブル：111, 113, 115］では墓地、川の浅瀬、荒れた汚い小屋

３．８．ゲセルの求婚（娘の父親から承諾を得る際）

［ＧＲ：5261－5372］にのみ、蛙の求婚のモチーフがある。

３．９．ゲセルの第一夫人は何番目の娘か

［ＧＲ：4909－5256］では三人娘の三女、［天祝：3726］と［貴徳：40］では三人娘の長女、［ブル：117］では七人娘の長女、［スタック：495］ではフランゴ・ブルンモ（天界の妹）。

［蒙古］と［オイラート］では語られていない。

３．１０．ホルの巻で戦死する人物

［蒙古：156］ではジャサ・シヘル（ゲセルの兄）、［オイラート：66］ザサ・シキル（ゲセルの兄）、［ＧＲ：5413, 11020］ではシェニンウ・アルダグ（天界の父の長女の息子の息子）、［貴徳：62］ではギャツァシェーカル（兄、天界の父の第二夫人の息子）、［ブル：151, 153］ブームリーフタン（キセルの双子の弟）。

３．１１．夫人がゲセル飲ませるもの

［蒙古：162］ではバク、［オイラート：63］では蜜、砂糖、食物、飲物、［ＧＲ：9070］では酒、［貴徳：60］では忘れ薬となっている。［ブル］には該当するくだりはない。

３．１２．通過障害

［蒙古：92］では二枚の屏風岩、［ＧＲ：9146－9237］ではンゼマ国のリ・ロンマ・カンサル（偽の太陽のモチーフ）、［ブル：157］では押し合っている崖。［オイラート］、［貴徳］にはこのくだりはない。

３．１３．夫人に対するゲセルのいたずら

［蒙古：30］では流産した子馬を服の裾のそばにこっそり置く、［オイラート：62］では仔馬

をアリオンゴアの懐に入れる、［ブル：119］ではロバの仔をランガ・ブルーモの寝巻きの中に入れる、といういたずらが描写されているが、［ＧＲ］、［貴徳］にはこういったいたずらは述べられていない。

３．１４．第一夫人の矢

［蒙古：157］ではジャサの矢、［ＧＲ：11170－11247］ではンダマ・シャサル（矢）、［貴徳：129］手紙、鶴、［オイラート］、［ブル］には該当する話はない。

３．１５．父（又はアカ・チドン）がゲセルを確認する物

［蒙古：169］では角杯、水晶の柄の七首(アイクチ)、［オイラート：74－75］ではナイフ、［ＧＲ：11650］では木椀がそれであるが、［貴徳］、［ブル］にはそういう話はない。

３．１６．アカ・チドンが隠れる所

［蒙古：177－178］ではかまど、袋、［オイラート：79－80］では物、箱、［ＧＲ：11819］ではヤクの袋に隠れる。［貴徳］、［ブル］にはそういったくだりはない。

３．１７．ホルの巻に鍛冶屋が登場するか

［蒙古：189.191］ではチョイルンダルハン工匠が登場する。［貴徳：185］、［ブル：161］、［リン・ケサール王物語：55］にも登場するが、［オイラート］には登場しない。［ＧＲ：2912－2934］はホルの巻の後半が欠如しているのではっきりとはわからないが、スゲルマ・ドゥアンジェウ（ゲセルの天界での名前）がフクロウに変身してンクアラ地方へ偵察に行ったとき、鍛冶屋が矢やシャベルを作っていて、チジョルマという娘が鍛冶屋を助けてふいごを押していたのを目撃し、娘の金の指抜きを取って帰って行く場面がある。

３．１８．ゲセルの第一夫人略奪の理由

［蒙古：114］では白帳ハーンの金光太子の后を捜しに、［オイラート：63］では白い家のハンの息子の后を捜しに、［ＧＲ：1040－1041］では皇帝の欲望のため、［貴徳：101］では黄色いテントの王(二十一歳の若者)の后を捜しに、［ブル：145］では皇帝の欲望のため、［リン・ケサール王物語：50］ではホル・コクシ王の后が亡くなったため、金子英一（1987）［hor ling：412］ではクルカル王の妃が死んだためということになっている。

３．１９．ホル国の大将に対する処置

［蒙古：199］では白帳ハーンを殺す、［オイラート：89］ではハンブラルチを殺す、［貴徳：208］ではシェンパーメルツを許すことにした、［ブル：175］ではパハールダン・ガルポ（王）を殺す、［リン・ケサール王物語：175］ではコクシ（王）を殺すことになっている。［ＧＲ］は最後の部分が欠如しているので不明である。

３．２０．第一夫人に対する処置

［蒙古：201］では彼女の片手、片足を折って80歳の羊飼いの老人に妻として与える、［オイラート：90－91］ではゲセルはオランゴアを連れて自分の故郷のほうへ行く、［ＧＲ：11532, 11552］では（第二夫人をンゼマ国に、第三夫人をリ・ロンマ・カンサルに残す）、［ブル：127］

では十二ヶ月間水汲みをさせる。［貴徳］には該当する描写がない。

4．［ＧＲ］と［天祝］の違い

［ＧＲ］と［天祝］とではかなりの違いがある一方で、細部にわたってよく一致する部分もある。比較的よく一致する部分でも細かく見ると次のような違いがある。

皇位継承のときの年齢が［ＧＲ：706］ではハムロ・チャルガン・サンが999歳のときであるのに対し、［天祝：28］ではハーロ・チャールガンが990歳のときである。リンの滅亡は［ＧＲ：825－1037］ではアカ・チドンが大宴会を催したからであるが、［天祝：58－1089］ではアーグ・シジャダンが周辺の国と戦争したからである。天界への要請の際の道連れとして［ＧＲ：1082－1219］では上部天王神の三女の息子のナフ・ンドンディ・サンを連れて行くが、［天祝：1726－1849］ではシュポリ・シュポタンという人物を連れて行く。［ＧＲ：1375，1401，1427］では上部天王神には三人息子、中部財宝神には二人息子、下部龍王神には一人息子がいるが、［天祝：2176，2208，2429］では上部天王神には一人息子、中部財宝神には二人息子、下部龍王神には三人息子いる。この結果、ゲセルの天界の父は［ＧＲ：1645－1646］では上部天王神であるが、［天祝：2578］では下部龍王神であることになる。天界への強迫[9]としては［ＧＲ：1447－1772］ではシリンカンゲ・サンが強迫するのに対し、［天祝：2471］ではハーロ・チャールガンが矢を射る。下界への探索[10]は［ＧＲ：2632－3065］では本人が鳥に変身して下界へ行くが、［天祝：2918］では姉が鷹に変身して下界へ行く。鳩をゲセルの（将来の）母は［ＧＲ：3261－3269］では夫に内緒で勝手に食べてしまうが、［天祝：2767－2976］では夫が食べるように促す。第一夫人へのいたずらとして［ＧＲ：5054－5056］では野鼠の袋に座らせるのに対し、［天祝：3758］では牛の膀胱に座らせる。第一夫人は［ＧＲ：5061，5071］では三人娘の三女であるが、［天祝：3724，3726］では三人娘の長女である。

5．裕固族・土族・海西蒙古族のゲセル比較

漢語音訳も併せて記す。［ＧＲ］の漢語音訳は施労得（Schröder）記録、李克郁（1994）のものを記す。

5．1．ゲセルのおじ

［裕固１：271］阿格超東（老和尚）、［裕固２：281］阿克紹東、阿克沙爾嘎勒、［東部裕固：117］akə tʂɔdɔŋ（阿卡喬登）、［土族格薩爾：49］阿庫喬堂（非常残暴的土司）、［海西蒙古：70］aka tsotoŋ xaːn（阿卡朝通汗）、［ＧＲ：638］aka tśidoŋ（阿卡其東）、［天祝：48］aaku ɕtɕa taŋ（阿古加党）

5．2．ゲセルの母

［裕固１：271］阿格超東（老和尚）の姪（誰も名前を知らない）、［裕固２：281］阿克紹東の妹、［東部裕固：117］akə tʂɔdɔŋ（阿卡喬登）の妹 maŋgandza（芒嘎匝）（お婆さん）、

［土族格薩爾：50］馬尕扎（老阿奶）、［海西蒙古：173］akɑ tsotoŋ xɑːn（阿卡朝通汗）の姉 ɑ mɑngəgdʒeː（阿敏格格吉）、［ＧＲ：3025］maŋkeg̃sa（杧卡莎）、［天祝：1090］maŋ qak ʂtsal tʂol maa（芒果薩卓瑪）

５．３．易者のいる所

［海西蒙古：70］では、500歳のナムザブハー（那木扎布哈）が、毎年水虎年の男の子を食べるマンガスを退治するために、獅子のような山の北、龍のような山の南麓に住む七人の霊感のある易者に占ってもらう場面がある。［ＧＲ：1780］ではスゲルマ・ドァンジェウ（ゲセルの天界での名）が自分が下界に降りて行くにふさわしいかどうかを占ってもらう場面がある。その易者の住んでいる所が共に、九層の獅子の口のような岩である。

５．４．雪

ゲセルが誕生したとき雪が降ったという描写が次の版には現れる。

［裕固１：271］、［東部裕固：118］、［海西蒙古：73］、［ＧＲ：3335］

５．５．ゲセルの幼名

［海西蒙古］の名前はチベット・モンゴルの名前と一致する。［ＧＲ］の名前はよく似ているが一致しない。

［海西蒙古：75］mɑŋgəg dʒur（范格格珠如）、［ＧＲ：3427a］mɑŋga śili（杧卡希利）

５．６．ゲセルを殺しに来るもの

［裕固１：273］三箇大力士、青狗、山鷹、［裕固２：283－284］魔王黒老鴉、魔王母狗、黒妖魔、［土族格薩爾：51－52］烏鴉将軍、狼精、神牛、［ＧＲ：3707，4009，4093］鳥、犬、九頭のヤク、［天祝：3286，3356］烏、犬

［裕固２］、［土族格薩爾］、［ＧＲ］でそれぞれ、黒妖魔、狼精、九頭のヤクがゲセルを食べに来るとき、ゲセルは（木）盤に乗せて差し出すように母に頼むという共通の話がある。

５．７．母の死

ゲセルの母の死が［裕固１：273］にだけ語られている。

５．８．ゲセルの第一夫人

姉妹の数、何番目の娘かが微妙に異なっている。

［裕固１：274］三女、［裕固２：287］二人の王女のうちの一人、［ＧＲ：4909－5256］三人娘の末っ子、［天祝：3726］三人娘の長女

５．９．娘の病気

［裕固１：274］にはゲセルが求婚に行ったとき、姉たち二人が病気になり、それを治してやるというくだりがある。

５．１０．野鼠の不足数

ゲセルが将来の第一夫人になる娘に対して、野鼠が足りないという言いがかりをつける場面が［裕固２］と［ＧＲ］にだけ見られる。ただし不足数は違う。

［裕固２：288］野鼠二匹不足、［ＧＲ：5127］野鼠一匹不足

５．１１．賭

［裕固２：288－289］には須弥山に登る、九尋の長さの九回曲がった角に縄を通す、須弥山を綱子で包む、百人の美女の中から皇帝の娘を探すという求婚の際の賭が語られている。［海西蒙古：74－75］では求婚とは関係なく、宴会、金と銀、日が昇る方角に蓮の花を取ってくるという、アカ・ツォトンとマンゲグ・ジュルの賭が三つある。［ＧＲ：5395，5527，5871－5872］には求婚の際の賭として、競馬、宴会、鳳凰の冠を取ってくるという三つがある。［天祝：3936，3956，3957］でも求婚の際の、競馬、弓、十三人の娘の中から目当ての娘を探す、という三つの賭がある。

［裕固２］と［天祝］のそれぞれ最後の賭は、東部裕固の民話「皇帝の娘と貧しい少年」の求婚の際の賭にも現れる。娘の父は少年に二つの条件を出す。その一つ目は、道のこちら側の端から羊のフェルトを広げ、あっち側の端に届かせ、両端に木を植えるというものであり、二つ目は百人の娘の中から目当ての娘を見つけるものである。（『東部裕固語話語材料』175－178）

５．１２．ねんねこや帯

叔父あるいはマンガスががゲセルを殺しに来るとき、ゲセルは母にねんねこや帯に入れるよう頼む。語彙は違うが、この言葉が次の二つの版に現れる。

［東部裕固：120］mantsu:l、［海西蒙古：76］øløgø

５．１３．マンガス

悪魔国の巻に登場するマンガスは次の通りである。頭の数が九の場合と十三の場合とある。［裕固１］と［ＧＲ］に現れるマンガスの魂は共に蛇である（9569－9571）。［ＧＲ］ではこのマンガスとゲセルは相撲をとるが、妻がマンガスの足元に豆を撒いて負かす（10113）。［裕固１］と［ＧＲ］ではそれぞれ九頭妖怪、悪魔が寝ると蛇が鼻から出て行くという共通の話がある。

［裕固１：276］九頭妖怪、［土族格薩爾：54］九頭妖、［海西蒙古：70］十三頭のあるマンガス、［ＧＲ］悪魔

５．１４．海島

［裕固１：275－276］には九頭妖怪がいる所として、他の版には現れない海島が現れる。

５．１５．悪魔国の娘

悪魔国の巻に出現する娘が各版で微妙に違っている。名前も対応しない。

［裕固１：276］牧羊姑娘、［土族格薩爾：54］一箇像仙女、角木郎の土司の娘、馬依扎木親（$ma^3yi^1z(h)a^1\ mu^4xin^1$）、［ＧＲ：9286］悪魔の娘、lëmu ardëğ（拉木阿爾達克）

５．１６．ゲセルが相撲をとるとき、妻が豆を撒く相手

［裕固１］に出現する白可汗は［ＧＲ］のホル皇帝に相当するが、語り手の勘違いか、ゲセルが相撲をとっているとき、足元に豆を撒かれるのは白可汗である。金子英一（1987：411－412）では魔王ルツェルンの足の下に豆が撒かれる。

［裕固1：279］白可汗、［GR：10141］悪魔

6．主要人物名等

藏文『ケサル』（［ケサル］と略す）、蒙文『ゲセル』（［ゲセル］と略す）、［GR］、［天祝］の主要人物名について述べる。［ケサル］と［ゲセル］の人名は金子英一（1987）、斉木道吉（1986）、斉木道吉著、若松寛訳（昭61）に基づく。［GR］の漢語音訳は施労得（Schröder）記録、李克郁（1994）のものを記す。

6．1．天界の父

［ケサル］白梵天王、［ゲセル］ホルムスタ（好日木斯東）「王皇大帝」、［GR：168］šdeŋlatśien saŋ（甚登拉欠桑）「上部天王神」、［天祝：1447］smat lur tɕan saŋ「下部龍王神」

［GR］と［天祝］で天界の父が異なっている事情は息子の数が違うからであるが、名前の点では［土族格薩爾：49］の卜当拉千（bu³dang¹la¹qian¹）と［GR］が対応する。

6．2．主人公の天界での名前

［ケサル］トゥンジュンガルボ（頓珠嘎爾保）、［ゲセル］ドンチュンガルボ（頓瓊嘎爾布）ウイレブトゥクチ（維勒布圖格其）「事業成就者」、［GR：1330］sgerma duändžëw（斯尕爾馬東加克）、［天祝：2578］skarma ton tʂəp（尕瑪頓珠）＜skar ma don grub

6．3．幼名

［ケサル］joru、ズル（足日）、ジョル（覚如）、［ゲセル］joru、ジョル（覚如）、［GR：3427a］maŋga śili（杧卡希利）

6．4．父親

［ケサル］と［ゲセル］では名前が一致するが、［GR］、［天祝］では一致しない。

［ケサル］gling chung brgyad dpon po　seng blong、［ゲセル］senglün、［GR：3025］xağ śdźialuo（哈克希加罗）、［天祝：1215］maŋ qak rəuu（芒格日）

6．5．母親

下線の部分がきれいに対応する。

［ケサル］'gag bza'ガチャ（嘎楂）、［ゲセル］gegsa　ゲシェ（更利）、［GR：3025］maŋkeğsa（杧卡莎）、［天祝：1090］maŋ qak ʂtsal tʂol maa（芒果薩卓瑪）＜Tib. mang 'gog bza' sgrol mo

6．6．兄

［ケサル］rgya sa zhal dkar ジャチャシェガ（賈察霞協葛）、ジャチャシャガル（賈察霞嘎爾）、［ゲセル］zhe－se－shi－gir ジャサシヘル（扎薩希黒爾）、［GR：5413］（šeniŋwu ar dağ）（謝寧哇阿爾達克）ホルの巻で戦死する人物

6．7．一夫人

下線の部分がきれいに対応する。

［ケサル］seng lcam 'brug mo ジュモ（珠牡）、［ゲセル］rog－mu ログモゴワ（茹格慕高娃）、［ＧＲ：4941］šdzaŋ šdza dzëgmu（斯藏莎）、［天祝：3709］ɸsaŋ ɸsan tʂu mo（桑賛数珠牡）

６．８．一夫人

下線の部分がきれいに対応する。

［ケサル］me bza' 'bum skyid ブムキト（布姆吉徳）、［ゲセル］トゥメンジャルガラン（圖們吉爾嘎蘭）、［ＧＲ：7834］mbašdza mbëšdzi（巴甚扎巴甚孜）、［天祝：4527］npaa ntsən pə ʨʨə（巴外＋日布吉）

６．９．叔父

下線の部分がきれいに対応する。

［ケサル］khro thung チョトン（晁同）、［ゲセル］chotung、［ＧＲ：639］aka tśidoŋ（阿卡其東）、［天祝：48］aaku ʨʨa taŋ（阿古加党）

６．１０．ゲセルの馬

きれいに対応する。

［ＧＲ：5401］sdzianguo yürewa（西江果王勒瓦）、［天祝：2776］ʨtaa nkon zər vaa（嘉高喜娃）

６．１１．ゲセルの犬

きれいに対応する。

［ＧＲ：5472］dala doŋtsü（達拉東其）、［天祝：2791］tə lo taŋ tʂhə（敵老当斉）

７．青海ゲセルと［ＧＲ］との関係

斉木道吉著、若松寛訳（昭61：　84）に「ノルジンの語った九章の『ゲセル・ハーン伝』第一章では、ウイレ・ブトゲクチが地上に降りる前に祝宴を開いていると、俄に昏倒して、杜鵑と化して飛んで行くが、これはチベット『ゲセル』にのみ見られるものである。」という記述がある。［ＧＲ：3250］でも魂が蜂に変わって飛んで行く場面がある。

また斉木道吉著、若松寛訳（昭61：86）に「スへの語った『アルチンディ・ゲセル・タイジ』で、アカ・チョトンがゲセルをその幼いときに十二面魔王に捨て与えたときのこと、ゲセルは魔王の喉頭にあくらをかいて坐っているうち、魔王の下あごを縫合部に沿って切って、これを殺してしまった。」という記述があるが、［ＧＲ：4163, 4164, 4166］に子供（＝ゲセル）はのどひこを摑んだ。足で心臓、気管を蹴った。気管を蹴って、心臓を切断したという場面がある。さらに、［海西蒙古：76］にも、のどにあぐらをかいて座って、突然立って走ると、あごを引っ張った。こうしてマンガスを退治したという描写がある。

8．［ブル］と［GR］との類似点

数えるための手段として、［ブル: 145］に、キセルがハイハイ国を去るとき、ブーブリ・ガス（第二夫人）に黍の種を2, 3ポンド渡し、十二ヶ月おきに山頂から鶏に一粒ずつ与えて、なくなったら帰って来ると約束する場面がある。［GR: 8997－9009］でも、ゲセルは第二夫人に四週間は何日かを教えるために白い紙を丸いお金のように二十四枚に切って赤い紐を通したものを渡す。

また、妻が夫を見て喜ぶ場面が、［ブル: 123］ランガ・ブルーモ（第一夫人）が馬に乗った夫（キセル）を姑といっしょに見て素晴らしいのに驚いて喜ぶ。［GR: 7421－7422］にも同じような場面がある。

ホルの巻で鉄の鎖が［ブル: 175］にも［GR: 9891］にも現れる。

9．［GR］に固有のモチーフ

土族のゲセルの三つの版のうち［GR］に固有のモチーフは、リンの最初の統治者ハムロ・チャルガン・サンの誕生、リンの滅亡の原因となったアカ・チドンの大宴会、ゲセルの求婚（「蛙」のモチーフ）、妻が皮衣を焼く（「蛙」のモチーフ）、ンゼマ国のリ・ロンマ・カンサル通過の際の障害（偽の太陽のモチーフ）である。

10．モチーフについて

10．1．［天祝］の第二章と「黒馬」

10．1．1．［天祝］の第二章（1090－1670）の粗筋

［天祝］の第二章はマン・ガグ・シュザル・ジョルマー（芒果薩卓瑪）の話であるが、これはゲセルの母であり、アーグ・シジャダンがマン・ガグ・ルー（芒格日）のためにもらいに行く次のような話である。

ラマが毎日外へ行って石の上にした小便を鹿が降りて来て嘗めていた。ラマが捕まえると、鹿は二十歳の娘に変わった。それはリーイー（里域）王の三女だった。娘は食事の世話をしながら、ラマと暮らしていた。ある日娘は炒粮食を焼いて食べたが、猫にやるのを忘れていた。猫は怒って尻尾を水瓶に漬けて火を消してしまった。娘は火を求めてアーグ・シジャダンの家に入ってしまった。火と共にもらったカラシ菜のせいで、家がわかってしまい、結局マン・ガグ・ルー（芒格日）の妻になる。

リーイー（里域）というのはアーグ・シジャダンがかつて戦って敗れた国の名前である。里域についてはp.718に「新疆南部クンルン山脈以北タクラマカン砂漠までの間の地区で、ホタン、チャルチャン、ニヤ、チャルキリクなどの地を含み、歴史上吐蕃は里域と戦ったことがある」という解説がある。

10．1．2．「黒馬」

［天祝］のくだりはゲセルの母の素性が語られている以外に、土族の民話「黒馬」のモチーフがそっくり使われているという点でも興味深い。次にその粗筋を述べる。

お婆さんが飼っていた黒馬が仔馬を産んだが、実は馬ではなく子供だった。子供は大きくなって、旅に出て、石兄と木兄に出合う。三人でいっしょに暮し、日中は外へ仕事をしにいっていると、ある日誰かが家に料理を準備してくれていた。石兄や木兄が見張っていたがわからなかった。黒馬（黒馬から生まれた子供）が見張っていると、三羽の鳩がやって来て娘に姿を変え、料理を作っていた。三人姉妹は三人兄弟の妻になる。やがて九つ頭のあるマンガスが現れて妻たちを困らせる。石兄や木兄が守っていたが二人とも失敗した。黒馬の子が見張っていてマンガスの頭を切り落とした。マンガスは逃げて行くが、少年の助けを借りて退治する。

［天祝］の第二章に出現する鹿が、「黒馬」の鳩である。これだけならあまり似ていないが、以上の粗筋は土族の「黒馬」の五つのバージョンから共通の部分を抜きだしたものである。「黒馬」には猫が登場するバージョンと、猫が登場しないバージョンとがあり、登場するほうの話は、Schröder(1959: 100－115)、Тодаева(1973: 282－295)、中国民間文藝研究会青海省分会編（1985: 23－30）に掲載されている。Schröder(1959: 100－115)から該当部分（142－168行）を和訳したものを記す。

妻は三人とも家に残った。夫は三人とも柴を刈りに行った。何の食べ物を食べても猫に分け与えるな。ある日、炒麦を食べた。猫に与えなかった。猫は腹を立てた。猫は尻尾を水桶で湿らせ火を叩き消した。妻は三人とも悲しんだ。夫が三人とも帰って来ると殴り殺される。さあ、火をどこへ探しに行きましょうか。石兄の妻はあちこち探した。煙を見て探しに行った。探して近くへやって来た。暗い穴の中から煙が出ていた。人は一人もいない。恐る恐る中に入って行った。マンガス婆さんが寝ていた。病気だった。「お婆さん、お婆さん、火をください。」「残念だ。どこの奴だ。火をやろう。カラシ菜の袋のそれを担いで行け。」カラシ菜の袋の底に穴があった。袋を担いでいった。カラシ菜は穴から漏れた。一本の道になって漏れて家へ着いた。雨が降り、日が照り、カラシ菜の芽が出た。芽が出て大きくなった。頭に黄色い花を咲かせた。マンガス婆さんは病気が治った。カラシ菜の花を見ながら三人の家へ行った。

このバージョンでは、猫が登場することでマンガスが出現するきっかけを作ることになっている。猫が登場するのとしないのと、どちらが本来の「黒馬」の話かわからないが、猫、食べ物、火、マンガス、カラシ菜というキーワードは［天祝］と一致する。違うのはマンガスではなく、アーグ・シジャダンであるという点のみである。しかしアーグ・シジャダンが無意識に悪者として扱われていることは興味深い。

１０．２．［天祝］の第五章と土族・東部裕固族の婚礼儀式

［天祝］の第五章はギーサルが第一夫人のンジュモを娶とる話であり、その後半に婚礼の儀式が詳しく語られている。この儀式は明らかに土族のもので、風刺の歌（ジャンジャン・マーンゼ）、催促の歌（アーイージェ）、仲人祝福歌が語られている(11)。

［天祝］にはディルカ（得爾尕）のしきたりが語られている。これは土族の婚礼儀式の記述には見あたらないが、保朝魯、賈拉森編（1988：309－315）の東部裕固族の婚礼賛辞に現れるdərkiと同一語源のものである。結納（xalaŋ）には三種類あって、皇帝の結納はxɑilɡətə、役人の結納はdərkitə、民衆の結納はɑrɡɑtə（計略のある）ということが分かる。しかし前者二語の意味について編者は何の逐語訳も与えていないし語彙集にも載っていない。

［天祝：4492－4494］に牛か羊か不明であるが、「尾骨を妻の兄弟に与えた。肩甲骨は婿だ。連なった肉の前股はナーシジンだ」という表現がある。このしきたりも土族の記述には見あたらないが、Тенишев, Тодаева（1966：80）に「羊の尾てい骨を新郎に、胸を新婦に与える」という東部裕固族の類似した記述があり注目に値する。

１０．３．［ＧＲ］の求婚と「蛙」

１０．３．１．［ＧＲ：5261－5372］の粗筋

子供は養母に嫁をもらうつもりであるということを話した。養母は笑って相手にしなかったが、子供にはいい方法があった。子供は天の父に香を焚いてお願いした。姉が見ていて、父にようすを話した。父は姉に葡萄酒一瓶とナツメを三つ採らせ、子供に与えた。子供は葡萄酒とナツメを持って嫁をもらいにサン・シジャロのところへ行った。子供は身を隠して入口のところからサン・シジャロの名前を呼んだ。下僕が二回見に行ったけれども、誰もいなかったので、サン・シジャロは自ら見に行った。誰もいなかったが、敷居のところに酒が一瓶と赤い果物が三つあったので、酒を飲み果物を食べた。それでもまだ名前を呼んでいるので、妻に見に行かせた。誰もいなかった。再びサン・シジャロが見に行くと、鼻を垂らした子供がいた。サン・シジャロは怒って、帰らないなら棒で殴ってやると言った。子供が嫁をもらいに来たことを告げても、サン・シジャロは納得しなかった。子供は葡萄酒も飲みナツメも食べておきながら、くれないとはどういうことかと詰問した。サン・シジャロは自分は皇帝だから毎日酒も飲むしナツメも食べる。これがおまえの酒でナツメだということがどうしてわかるかと言って子供を困らせた。子供はサン・シジャロに吐くように要求した。吐き出した酒とナツメは子供の持ってきたものと同じであったが、サン・シジャロは娘をやるとは言わなかった。子供はくれないのなら泣くと言って庭を水びたしにした。サン・シジャロは慌てて泣くのを止めさせたが、子供が泣き止むと、また娘をやらないと言った。くれないのなら笑うと言って、子供は庭に火をつけた。サン・シジャロの妻が火を消させて、娘をやりなさいと頼んだ。

１０．３．２．「蛙」

「蛙」のバージョンは数多くあり、結末も様々である。チベット、土族以外に回族にも伝わっ

ている。ここではТодаева（1973：213－230）の粗筋を紹介する。求婚以外の部分を簡単に、求婚の部分をやや詳しく描写してみる。

お爺さんとお婆さんは子供を求めて祈願していた。ある日、お婆さんの指から蛙が生まれた。この蛙は農作業をしているお爺さんのところへ、お茶を持って行ったり、土地を耕したり、牛を放牧したりすることができる能力をもっていた。

ある日、蛙は嫁をもらって欲しいと言った。父母は相手にしなかったが、蛙は、下の村の老人のところに三人娘がいて、一人をくれると言った。隣家の老人に酒瓶をもたせて仲人として派遣した。娘の父は喜ばなかった。仲人から事情を聞いた蛙は自分で行くことにした。

次の日、蛙は自分で酒とナツメを二つ首につけて娘の家へ行った。家の入口のところに来ると、「お爺さん、出て来てください。」と叫び、船の中に入って座った。

娘の父が出て来たとき、誰もいなかった。入口の前に、酒瓶とナツメが二つあった。「これは誰が持ってきたんだろう。」と言ってナツメ二つを食べ酒を飲んで、家へ入って行った。

蛙は船の中から出て、家に入って行って炕の上に座った。娘の父が入って来ると、「お爺さん、娘さんを嫁にもらいに来ました。」と言った。父親は「このいやな蛙の奴、踏み殺してやる。」と追っかけて行った。蛙はこっちへ跳ねたり、あっちへ跳ねたりして捕まえることができなかった。

「私に娘をくれないのなら、ナツメと酒を食べたり飲んだりしたのはどうしてですか。」

「つべこべ言うな。あっちへ行け。」

「娘をくれないのなら、家を水浸しにしてやる。」

「そんな才能があるのなら、水浸しにしてもらおう。水浸しにできたら、娘をやろう。」

蛙は「見ていろ。」と言って家を水浸しにした。

父親が慌てて、「もういい、水を止めろ。娘をやる。」と言うと、蛙は水を止めたが、父親は、

「わしは娘をやらない。」と言った。蛙は、

「娘をくれないなら、家を燃やして灰にしてやる。」

「娘をやることはできない。」

蛙は火を吹き出した。父親は再び慌てて、

「もういい、この火を消してくれ。娘をやろう。」と言った。蛙は火を消した。

末娘が走って父のところへ行って、

「お父さん、あげなくてはなりません。お姉さんが二人とも行かないのなら、私が行きます。」と言うと、父は、

「うん、今おまえたちの一人をやらなければならない。おまえが行くならおまえをやろう。」と言った。

蛙はこれを聞いて喜んで、跳ねて父親のところへ行き、

「お爺さん、三日後盛大な宴会を開いて末娘をもらおう。」と言った。父親は喜ばなかったが、無事宴会を開き娘を家に連れて帰った。

この後、娘は芝居を見に行き、芝居の中に馬に乗ったすばらしい青年を見つけ、その青年が実は蛙（すなわち夫）であることに気付いた。蛙は家では皮を被っていたが、この皮を脱いで芝居の中に出演していた。娘は青年が家に脱いでおいた皮を燃やしてしまった。青年はもう少し皮を燃やさないでおいてくれたら、世の中の貧富の差をなくすことができたのにと嘆いた。

１０．３．３．求婚の仕方の比較

［ＧＲ］と「蛙」を比べると、数は違うがナツメと酒を持って行くこと、水浸しにすること、火をつけることという共通点が見られる。ナツメと酒を置いておいて、勝手に食べたり飲んだりしたところで言いがかりをつけるというやり方、父親は最後まで許さないという点で両者は完全に一致している。

土族人の婚礼の儀式についてはТодаева（1973：187）に紹介がある。それによると、両親が息子を結婚させようと決めたら、まず善良で美しい娘を知っている人を探し仲人をお願いする。仲人を派遣するとき酒一瓶と饅頭（shdima）二皿を持って行かせる。娘の両親が娘をやろうと言ったら仲人は酒一瓶を置いて帰る。両親がこの話をまとめる気がなければ、仲人が持ってきたものをそっくり返すという習慣がある。つまり、ナツメと酒を食べたり飲んだりしたことは結婚を承諾したものとみなされるわけである。ここでは饅頭ではなくナツメ(zauri＜棗兒(zaor[3]))が使用されている。

中国民間文藝研究会青海省分会編（1985：1－22）「巴蛙莫日特」は三人の土族から土族が採録しその後、整理がなされているので、話の筋はТодаеваの収録したものよりはかなり脚色されている。この話ではナツメと酒ではなく犏乳牛の乳及び新鮮な乳で作った酒であり、父親を困らせるやり方は笑うこと、泣くこと、跳ぶことの三つである。笑うほうが泣くより先にきている。

日本民話の会編（1989：169－170）では、父親への土産に関する記述はないが、末娘をもらうという点では共通である。蛙が娘の父親を困らせるやり方は、「巴蛙莫日特」と同様、笑う（館がぐらぐらゆれる）、泣く（雷鳴がとどろき、山頂から水がどっと押し寄せる）、とぶ（山と山がぶつかり合い、岩が飛んで太陽も見えなくなる）の三つである。

日本民話の会編（1989：170）の解説に、「チベット・イ語系の民族の話では、この話のように蛙が泣いたり笑ったりして天地を振撼（しんかん）させており、蛙を雷神の息子とするなど、神聖視する信仰の影響がうかがえます。また動物婿の話では、結婚後、妻に皮を自由にぬいだり着たりできることを知られて皮をとりあげられてしまうと、そのまま人間の姿にとどまる話が多く、チベットにもそういうハッピー・エンドで終わる話もあります。」とあることから判断して、［ＧＲ］のこのモチーフは新たに付け加わったものであることがわかる。

１０．４．サン・シジャロの容貌と土族の童謡「羊の体をした蜂」

ゲセルの第一夫人の父親、サン・シジャロの容貌が次のように語られている。

5692　魂　　大きなロバの糞のような蜜蜂
5721　手足　　褐匠の杖
5725　体　　羊糞
5726　角　　ハイナクの角
5727　目　　牛の目
5728　翼　　鳶の強健で大きな足
5729　声　　ラマの声
5730　尾　　武術者

これは明らかに土族の童謡「羊の体をした蜂」と関係がある。清格爾泰等編（1986：93－94）に席元麟の土族民族文学概況があり、その二．故事　２．「羊の体をした蜂」に次のような歌が紹介されている。これは蜂が自分の体を羊糞にたとえ大きな教養を吹聴するものである。（／は改行を表す）

羊糞の体をした蜂／兎は彼といっしょに行かない／彼の頭は私の首にある／私の小屋で寝ない／彼の角は私の頭にある／龍の宮へ私は行かなかった／彼の耳は私に生えた／医者、それは私ではない／私の体に万の薬がある

同様に清格爾泰等編（1986：465）詩歌類　４．童謡（３）「羊の体をした蜂」に次のような歌が載っている。（／は改行、‖は改行して一行開けることを表す）

虎の家族の私でもない／虎の頭が私にはある‖蜘蛛の家族の私でもない／蜘蛛の足が私にはある‖蟻の家族の私でもない／蟻の体が私にはある‖鳳の家族の私でもない／鳳の冠が私にはある‖蛇の家族の私でもない／蛇の目が私にはある‖牛の家族の私でもない／牛の鼻が私にはある‖鼠の家族の私でもない／鼠の口が私にはある‖医者の家族の私でもない／医者の薬が私にはある‖武官の家族の私でもない／武官の刀が私にはある‖

１０．５．偽の太陽

［ＧＲ：9149－9178］でゲセルがンゼマ国へ行く途中リ・ロンマ・カンサルへやって来たとき、七つの偽の太陽が出てきて山の土が火のように流れ落ちてきたというくだりがある。数が違うしカラスが現れないが、これは明らかに「太陽の中のカラスと十個の太陽」（中野美代子(1994：35－40)）と関係がある。この神話は中国ばかりでなく、北アジアにもあったことが紹介されている。モンゴルにも七つの太陽とツバメが登場する話がある（塩谷茂樹訳編(1995：36－39)「弓の達人」）。

１１．おわりに

モチーフの分析はよほど注意しなければ、少数の資料に頼っただけでは重大な間違いを犯す可能性がある。例えば、斉木道吉著、若松寛訳（昭61：85）は藏文『ケサル』（『ホル・リン大戦』の『ホルの侵入』）と蒙文『ゲセル』（『シャライゴル三汗の侵入』）の違いの一つに、「白帳

汗が自分の色欲を満足させるために、一美女を娶って伴侶にしようと思ったのではなくて、白帳汗はその息子アルタンゲレル（阿拉担格日勒）のために、一美女をその嫁に娶ろうとした」と述べている。しかしこの違いをもってチベット版とモンゴル版の違いとしてしまうわけにはいかない。同じチベット版の［貴徳］では、黄色いテントの王（二十一歳の若者）の后を探しに行くのであるから、むしろモンゴル版に近い記述がなされている。したがって軽々しく結論を述べることはできない。土族のゲセルはどちらかと言えば、チベットのケサルに近いように見えるが、モンゴルのゲセルともチベットのケサルとも区別される叙事詩である。［ＧＲ］、［天祝］、［土族格薩爾］は各語り手が自分の裁量で付け加えた固有のモチーフを持ちながら、驚くほど共通したモチーフも持っている。

最後に主人公のの名前について述べておく。［ＧＲ］ではgeser、［天祝］ではkii sarである。［ＧＲ］はモンゴル的であることが一目瞭然であるが、［天祝］もモンゴル的である。というのは、この形は天祝方言の特徴を如実に表しているからである。つまり土族語の標準語である東溝方言のeeはある場合には天祝方言ではiiに対応し、東溝方言のｅは天祝方言ではｒの前で広い変種aになるからである。さらにこのテキストの表記のｋは無声無気音を表しているので、［ＧＲ］のｇと同じものである。第一音節の母音が長母音になっている理由はよくわからない。ともかく［天祝］の形がチベット語のケサルの形に近いとは言えない。

註

（１）Дамдинсүрэн(1956: 3)は「…熱い国のガンガ川（ガンジス川）から寒いシベリアのアムール川まで、南方のハタン川から北の果てのズレク川まで…」と表現している。斉木道吉（1986:59）はこれを引用し、「恒河（＝ガンジス川）から黒龍江（＝アムール川）まで、黄河から勒拿河（レナ川）まで…」、Angčinküü, Sečenmöngke čoγlaγuljυ emkedgebe（1984: 1）は「…熱い国のガンジス川から寒帯のイジル川まで…」と表現している。なお、ブルシャスキーやスタックはパキスタン北部にありインダス川の流域にある。

（２）Heissig(1977)のテキストについてYang Si (1987)の短い考察がある。これについてはさらに検討を要する。

（３）［ＧＲ］のドイツ語で書かれた部分については瓦・海希西（1986）という漢語訳があるが、登場人物の名前の表記にはバリエーションがありドイツ語を機械的に訳したものにすぎない。施労得（Schröder）記録、李克郁訳（1994）では同一人物には同一の漢字表記が施されている。この翻訳の問題点については角道（1996）を参照のこと。

［土族格薩爾］は漢語だけである。［天祝］はＩＰＡで記した土族語天祝方言、チベット語天祝方言、チベット文語、漢語逐語訳、漢語訳がある。ただし漢語逐語訳は内容語にのみ施されていて、機能語には施されていない。

（４）［ＧＲ］は次のように区分できる。

リンの誕生・滅亡の巻

ハムロ・チャルガン・サンの誕生（1－190）

神国の三人娘（191－248）
三人娘の子供の誕生（249－541）
リンの繁栄（542－628）
アカ・チドンの誕生（629－650）
アカ・チドンの皇位継承（651－824）
アカ・チドンの大宴会、リンの滅亡（825－1037）
神国の巻
神国への請願（1038－1446）
シリンカンゲ・サンの知恵（1447－1772）
スゲルマ・ドゥアンジェウ、易者を呼びに（1773－2141）
易者の占い（2142－2282）
統治者の催促（2283－2631）
養父母の探索（2632－3065）
転生の巻
転生（3066－3308）
（3309－3318　欠）
アカ・チドンの殺害計画（3319－3427）
アカ・チドン、悪魔国へ、ルルザン皇帝、鳥を派遣（3428－4003）
犬を派遣（4004－4189）
子供の成長（4190－4226）
アカ・チドン、再び悪魔国へ（4227－4398）
悪魔皇帝、息子を派遣（4399－4527）
老夫婦と子供、サン・シジャミ・リンへ（4528－4637）
悪魔皇帝との弓の勝負（4637’－4897）
サン国の巻
サン・シジャミ・リンへ到着（4898－4908）
サン・シジャロ皇帝の三人娘との出会い（4909－5260）
求婚（5261－5372）
婿選びの競馬（5373－5523）
大宴会（5524－5863）
鳳凰の冠を取りに（5864－6011）
末娘を追放（6012－6136）
リン国の巻
養父ハグ・シジャロとの再会（6137－6210）
再びアカ・チドンのところへ（6211－6673）
リンの誕生（6674－6747）
築城（6748－6848）
野鼠地方へ（6849－7062）
開城（7063－7147）
老いた皇帝との再会（7148－7222）
ゲセル、帰城（7223－7250）
ゲセルの病気（7251－7388）
妻、ゲセルの皮衣を焼く（7389－7657）
ラマの剃髪（7658－7717）
ゲセル、再び病気に（7718－7777）

ゲセルの指示（7778－7826）
シン国の巻
ゲセル、シン国へ（7827－8221）
宴会、相撲（8222－8433）
四つ子の誕生（8434－8545）
シン国とリン国の戦い（8546－8719）
ゲセルの帰省（8720－8975）
ンゼマ国の巻
第二夫人の家出、悪魔皇帝の妻に（9009－9045）
ゲセル、出発（9046－9145）
ゲセル、ンゼマ国へ（9146－9237）
悪魔国の巻
ゲセル、悪魔国へ（9238－9508）
悪魔皇帝の娘が悪魔皇帝の退治の仕方を教える（9509－9723）
ゲセル、妻を発見、悪魔皇帝、降参（9724－10379）
ホル国の巻
アカ・チドン、ホルに密告（10380－10400）
ホル皇帝、鳥を派遣（10401－10446）
（10467－10518　欠）
ホル皇帝、鳥を派遣（10519－10684）
ホルとの戦い、サシン・ンダドマの凱旋（10685－10985）
シェニンウ・アールダグの死（10986－11169）
第一夫人を略奪（11170－11274）
老いた皇帝の出現（11275－11317）
ドルジ・サンフエン、悪魔国へ（11318－11438）
ゲセル、出発（11439－11560）
ゲセル、アカ・チドンの城へ（11561－11659）
ゲセル、リンの城へ（11660－11945）
おばを呼びに（11946－11999）

以下欠

［天祝］の目次を『格薩爾文庫』第三巻の漢語訳に沿って記すと次のようになる。

第一章　ハーロ・チャルガーン・サンは年をとり位を譲る
一．ハーロ・チャルガーン・サンは年をとる（1－45）
二．アーグ・シジャダンが機会を利用し権力を奪う（46－57）
三．アーグ・シジャダンの兵、ホルに敗れる（58－176）
四．アーグ・シジャダンの兵、悪魔部に敗れる（177－414）
五．アーグ・シジャダンの兵、チベットに敗れる（415－633）
六．アーグ・シジャダンの兵、リーイー（里域）に敗れる（634－1089）
第二章　里域王の王女が果部にやって来る、マン・ガグ・ルーとマン・ガグ・シュザル・ジョルマーが結婚する
一．名前の知られていないラマが里域王の三女を養う（1090－1215）
二．ワトマ・ニルーがマン・ガグ・ルーとマン・ガグ・シュザル・ジョルマーの媒酌をする（1216－1670）
第三章　ハーロ・チャールガン、民衆の為に再び苦労して天界へ神の子を求めに行く
一．ハーロ・チャールガン、苦労して天界へ行く（1671－1849）

二．ハーロ・チャールガン、天王神に会いに行く（1850－2134）
三．ハーロ・チャールガン、中部財宝神に会いに行く（2135－2211）
四．ハーロ・チャールガン、下部龍王神に会いに行く（2212－2686）
五．ハーロ・チャールガン、グランに帰る（2687－2757）
六．龍王神、息子を派遣する（2758－2871）

第四章　神の子スガールマ・ドンジブ、人に受胎す、アーグ・シジャダンが神の子をおとしめる
一．神の子スガールマ・ドンジブ、マン・ガグ・シュザル・ジョルマーに受胎す（2872－2976）
二．アーグ・シジャダンはマン・ガグ・ルーに独立して一家を構えるように迫る（2977－3147）
三．ギーサル誕生（3148－3230）
四．ギーサル、アーグ・シジャダンをやっつける（3231－3275）
五．ギーサル、魔王をやっつける（3276－3538）
六．ギーサル、狩りをする（3539－3670）

第五章　ギーサルがンジュモに会う、チシャン・ンダルマが仲人をし結婚する
一．ギーサルがンジュモに会う（3671－3806）
二．チシャン・ンダルマが仲人をし結婚する（3807－4024）
三．ギーサルは結婚しンジュモを迎える（4025－4527）

第六章　ハーロ・チャールガンがギーサルを訪問するよう気を遣う、武術格比べでギーサルが王になる
一．ハーロ・チャールガンは将軍にギーサルを訪問させる（4528－4773）
二．武術比べでギーサルが一位になって王になる（4774－4872）

（5）ゲセルの母の素性について、他の版では次のように語られている。

前田太郎編（大3）『世界風俗大観』十　蒙古の神話にCurtainのJourney in southern Siberiaの訳が紹介されている。その二　ゲシル・ボクドウには、マラト（Marat）という民族があり、その南部のアルタイ・デダ（Altai Deda）という土地に老夫婦がいて、夫は七十歳でスンドレイ・ウググン（老人）（Sundlei Ugugun）、妻は六十歳でスンドレイ・ハミアガン（老女）（Sundle Hamiagan）といった。

山口瑞鳳（1987：290）には「ケサルの母は青海の竜王の娘であったが、青海の南のゴクの国、黄河の支流域にいた。リンがゴクを滅ぼしたとき逃げるところを捕らえられ、その王の娘分からリンのセンルン王の第二夫人になった。」とある。

金子英一（1987）によると、『トゥン・リン（khtung gling）』では、ケサルはゴクサ・ラモ（gog za lha mo）とリン国王センロン（gling chung brgyad dpon po seng blong）から誕生し幼名をチョル（jo ru）と名付けられ、幼い時に悪い叔父ドォドゥン（khro thung）に殺されそうになる。

フレデリック＆オードリー・ハイド＝チェンバース編、中島健訳（1996）はカムのサムドゥ僧院にある一連のフレスコ画に基づいて作られたものでクショ・ララという活仏が語ったものを英訳したものから和訳したものである。この中で、ゲサルの母は次のように語られている。水に住む蛇の精の一つである若いナーガがゴンモという名の美しい娘の姿になりリン王国にやって来たところを、王国の執事トントンが、自分の妹（＝リン国の王妃）に仕えさせた。ゴンモはリン国の王シニンの第二夫人になる。鉢の水を飲むことによってゴンモはツブバ・ガワ（＝ゲサル）を身籠る。

（6）アバドゥンブというのは、小麦の中から現れ金持ちの義理の娘によって育てられるドゥンガ・ミールという人物の長男でロバの頭、人の体をしている。主人公キセル（＝ゲセル）は双子の兄として、アバ・ドゥンバとその妻の間に生まれる。

（7）このキセルの容貌は、ホル国王に捕まったキセルの第一夫人、ランガ・ブルーモが語ったものであり、家来たちがキセルを発見し、ホル国に入らせない目的がある。これに対して、キセルは次のような弁解をして、自分がキセルではないと主張する。

容貌	理由
短い足	小さい頃はくものがなくて獣の生皮をはかせられたため、足が圧迫された
細い腰	産着を来ていた頃、革紐でつないでおかれた

広い背中	人々の荷物を担いでいるうち広くなった
一本の歯が青い	ポロをしていて恐ろしい男が打ったボールが歯に当たった
猫の目	母が妊娠中に猫に恋をした
狭い額	鉢巻が見つからなかったから革紐で縛られた
大きな頭	—

（8）庇護者は、ゲセルが困っているとき現れる。［GR］で姉が何かに変身して現れる場合のみを取り上げると次のようになる。

［GR］

行番号	変身するもの	目的
3257	ハイタカ	下界に青い鳩に変身して降りて行くスゲルマ・ドゥアンジェウを殺す
4030	大きい石	ゲセルを殺しに来た犬を手臼の上で押さえつける
4758	黒い鳥	ゲセルがアカ・チドンと悪魔皇帝の魂を討ち取るための縄を投げる
5009	雷	ゲセルの第一夫人になるはずの娘を洞穴に避難させるため雨を降らせる
6871	黒い鳥	野鼠皇帝の居所が分からず眠っていたゲセルを起こす
7571	黒い鳥	母と妻が燃やそうとしたゲセルの皮衣を取り上げる
8896	妻	第一夫人と喧嘩して家出した第二夫人を止める
9120	白い鳥	ゲセルを探しに行った第一夫人からゲセルを離す
9250	白い鳥	悪魔国へ行くゲセルに悪魔の様子を説明する
9623	黒い鳥	寝ているゲセルを起こす

［天祝］では姉は次のように現れる。

2760	スガールマ・ドンジブの姉を道連れとして降りて行かせることにする
2805	スガールマ・ドンジブが姉に途中の様子を尋ねる
2910	スガールマ・ドンジブが姉に地上の様子を尋ねる
2960	スガールマ・ドンジブが鳩に変身して下界へ飛んで行くとき、姉が後ろから続いて降りて行く
3309	ギーサル（ゲセル）が鳥に押さえつけられて動けないとき、父、母、姉が助けに来る
3401	チャーロクー・カーショという犬に呑み込まれたギーサル（ゲセル）が出て来られなくなったとき、姉が助けに現れる
3492	姉は鷹に変身して降りて来て、魔王が脱いだ服を取って半天の方へ飛んで行く
3961	求婚のときの三つめの賭で、十三人の娘の中から目当ての娘を見つけられなくて困っているとき、姉がカササギに変身してその娘がいるの籠の上に降りて来る

（9）天界への強迫の仕方

［GR］では天界への要請がなかなか受け入れなくて老いた皇帝（＝リンの最初の統治者）が困っているところへ、知恵を授けるシリンカンゲ・サンという人物がいる。彼は、チラ・ンゴ・ルグ（七つの頭があるヤク）が、天王神の寺院を壊し、牛を食べ尽くし、国を滅ぼす。角が天に届き、尾が地に垂れ、目が赤い火で、蹄が赤い火の輪のようなルドンヤン・フガンバンが寺院も人も牛もなくしてしまう。チセリル・ドンマルという亀が水浸しにすると言って脅せばよいという助言を与える。

(10) スゲルマ・ドゥアンジェウの下界への探索の様子は次のように語られている。

行	変身する鳥など	行き先	取ってくるもの／落とすもの（将来の夫人のいる所）
2639	黒い鳥	悪魔国	城の扇子
2761	フクロウ	ホル国	羽
2805	黒い鳥	ムゾ国のサタル皇帝の城	果物
2829	斑のカササギ	ンゼマ国	毛
2854	カッコウ	リン国	金の指輪（将来の第一夫人）
2885	オオハクチョウ	シン国	赤い絹（将来の第二夫人）

2913　フクロウ　　ンクアラ国　　金の指抜き
2952　カッコウ　　中央・隅リン

(11) Schröder、Тодаева、清格爾泰等編、［天祝］の婚礼歌の構成を比較すると以下のようになる。

	Schröder (1952: 303－354)	Тодаева (1973: 187－209)	清格爾泰等編 (1986: 303－370)	［天祝］第五章三 (4025－4527)
1	太陽と月	太陽と月	－	－
2	タンデレギーマ	－	－	－
3	－	ゆかり歌	－	－
4	ジェンジェマシュザ (Ⅳ－Ⅵ)	ジェンジャマルサ	ジャンジャマーサイ (1)－(3)	ジャンジャン・マーンゼ (4043－4098)
5	－	－	仲人けなし歌	－
6	－	（ダンス）	（アンジョー）	（踊り）
7	アイジ (Ⅶ－Ⅸ)	アイジ	イジェー	アーイージェ (4107－4130) (4137－4161)
8	－	－	到着歌 （ララグロー）	－
9	－	－	お辞儀歌	－
10	－	－	嫁入り道具到着歌	－
11	酒注ぎ歌	－	－	－
12	仲人祝福歌	仲人祝福歌	仲人祝福歌	仲人祝福歌 (4207－4215)
13	－	－	酒注ぎ歌	－
14	－	－	ハイジェー	－

参考文献

陳剣英編、長尾荘一郎、渋谷千春、曽麗卿訳（1991）『チベット民話』外文出版社　北京
チョイロルジャブ著、若松寛訳（1988）「新発見のモンゴル『ゲセル』」『東洋史苑』（龍谷大学東洋史学研究会）第32号　79－97
ハイド＝チェンバース、フレデリック＆オードリー編、中島健訳（1996）『チベットの民話』青土社
ハルヴァ・ウノ著、田中克彦訳（1989）『シャマニズム　アルタイ系諸民族の世界像』三省堂
二木博史（1987）「モンゴルの神話伝説」村杉勇編『世界の神話伝説総解説』自由国民社　146－159
角道正佳（1994）「土族の民話『黒馬』のバーション」『大阪外国語大学論集』11号103－117
角道正佳（1996）「ゲセルの求婚と蛙の求婚　－土族語の民話から－」『朔風』（大阪外国語大学モンゴル語研究室）第4号　94－108
角道正佳（1996）「*Geser rëdzia－wu*の語彙」『大阪外国語大学論集』第15号　83－108
金子英一（1987）「ケサル叙事詩」長野泰彦、立川武蔵編『北村甫教授退官記念論文集　チベットの言語と文化』冬樹社 408－427
加藤千代訳・解説（1972）「リン・ケサール王物語　ホル・コクシ王との戦いの巻」『中國』第109号（1972年11月号）48－61
君島久子（1987）『ケサル大王物語　幻のチベット英雄伝』世界の英雄伝説9　築摩書房

李樹江主編、田中瑩一・胡軍訳（平5）「中国回族の昔話（上）」日本昔話学会編『日中昔話の比較』昔話－研究と資料－　第二一号　三弥井書店
前田太郎編（大3）『世界風俗大観』東京堂書房
中田千畝（昭16）『蒙古神話』郁文社
中野美代子（1994）『中国の青い鳥　シノロジー雑草譜』平凡社ライブラリー な61 平凡社（初出は1974年12月「is」7号）
日本民話の会編（1989）『世界の民話』講談社
ペマ・ギャルポ監修、関根房子編（1993）『チベット民話28夜物語』山手書房新社
塩谷茂樹訳編（1995）『草原の国のむかし話　－モンゴル－』能登印刷出版部
田中克彦（1963）「ゲセル物語のモンゴル語書写版諸版の相互関係について」『一橋論叢』第50　巻第1号　109－129
田中克彦（1965）「ブリヤート口承ゲセル物語にあらわれた二つの文化層」『民族學研究』29巻　3号 272－282
鈴木道子（1982）「フンザの口承文芸」『東西音楽交流学術調査』（国立民族学博物館）25－53
山口瑞鳳（1987）『チベット』上　東洋叢書3　東京大学出版会
若松　寛（1991）「近十年来中国《格斯爾》研究簡介」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第71号 3－7
若松　寛（1993）『ゲセル・ハーン物語　モンゴル英雄叙事詩』東洋文庫 566　平凡社
若松　寛（1994）「ゲセル　－草原に現れた神の子」『月刊しにか』1994年 Vol.5 No.1, 38－43

保朝魯、賈拉森編（1988）『東部裕固語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書 018　内蒙古人民出版社
查干哈達　記録、整理（1986）「格斯爾伝」海西蒙古語話語材料『民族語文』一九八六年第二期（総第三十八期）70－80
甘肅省《格薩爾》工作領導小組辦公室、西北民族学院《格薩爾》研究所編纂（1996）『格薩爾文庫』第三巻　甘肅民族出版社
郝蘇民編（1987）『東郷族保安族裕固族民間故事選』中国少数民族民間文学叢書・故事大系　上海文藝出版社
斉木道吉（1986）「関于蒙文《格斯爾》的幾箇問題」中国社会科学院少数民族文学研究所主編『格薩爾研究』第二集　中国民間文藝出版社　北京　59－79
斉木道吉著、若松寛訳（昭61）「蒙文『ゲセル』に関する若干の問題」『佛教史学研究』（佛教史學會）第29巻　第1号　77－99
清格爾泰等編（1986）『土族語話語材料』蒙古語族語言方言研究叢書　015　内蒙古人民出版社
却日勒扎布（1986）「蒙古《格斯爾傳》淵源管見」中国社会科学院少数民族文学研究所主編『格薩爾研究』第二集　中国民間文藝出版社　北京　114－123
施労得（Schröder）記録、李克郁訳（1994）『土族格賽爾』青海少数民族古書叢書　青海民族出版社
瓦・海希西（1986）「多米尼克・施羅德和史詩《格薩爾王伝》導論」中国社会科学院少数民族文学研究所主編『格薩爾研究』第二集　中国民間文藝出版社　北京 239－266
王興先（1986）「藏族、蒙族《格薩爾王傳》的関係及所謂“同源分流”問題」中国社会科学院少数民族文学研究所主編『格薩爾研究』第二集　中国民間文藝出版社　北京　80－92
中国民間文藝研究会青海省分会編（1985）『土族民間故事選』中国民間文藝出版社北京
朱剛、席元麟、星全成、馬学義、馬路、循集辯編（1992）『土族撒拉族民間故事選』中国少数民族民間文学叢書・故事大系上海文藝出版社　上海

Angčinküü, Sečenmöngke čoγlaγuljᵾ emkedgebe (1984) *Oyirad geser ün tuγuji*, Öbür mongγol un soyul un keblel ün qoriya
（安柯欽夫、斯琴孟和採集整理（1984）『衛拉特格斯爾傳』内蒙古文化出版社出版、内蒙古海拉爾新華印刷廠印刷、呼倫貝爾盟新華書店発行）

Bayantoγtoqu(1993) ‘ “Geser” taki enedkeg soyul un ula mör,’ *Öbür mongγol un ündesten ü baγsi yin degedü surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül* (gün uqaγan neyigem ün sinǰilekü uqaγan u mongγol keblel) 1993 on u ebül ün quγučaγa (yerüngkei 43 duγar)43－50
（宝音陶克涛「《格斯爾》的印度文化」『内蒙古民族師院学報（哲学社会科学・蒙古文版）』一九九三年冬季号（総第四十三期）43－50）

Čoyirolǰab(1987) ‘Mongγol “Geser” ün sine oldaburi,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1987 on u 2 duγar quγučaγa 65－76
（却日勒扎布（1987）「新発現的蒙古《格斯爾》」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九八七年　第二期　65－76）

Čoyirolǰab(1987) ‘Usutu yin ǰuu yin “Geser” ün maγadlal,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1987 on u 4 düger quγučaγa 80－89
（却日勒扎布（1987）「烏素圖召《格斯爾》考」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九八七年　第四期　80－89）

Čoyirolǰab(1989) ‘Mongγol “Geser” ün öbermiče sinǰi,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1989 on u 4 düger quγučaγa 69－88
（却日勒扎布（1989）「蒙古《格斯爾》的独特性考」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九八九年第四期　69－88）

Čoyirolǰab(1992) ‘Mongγol “Geser” ün qamaγ üǰelte,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1992 on u 1 düger quγučaγa 27－32
（却日勒扎布（1992）「関于蒙古文《格斯爾》最初版本之我見」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九九二年　第一期　27－32）

Gerelǰab(1996) ‘Qoγosun taγanaγ yum uu? Barimta tai notalalγa yum uu? Mongγol “Geser” ün qamaγ angqan u bar debter ün tuqai dakin ögülekü ni,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1996 on u 3 duγar quγučaγa 68－73
（格日勒扎布（1996）「毫無依据的猜測観還是有根有据的論証　－再論蒙文《格斯爾》的最初版本」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九九六年　第三期　68－73）

Heissig, Walther(1977) ‘Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tu－jen)－Version eines Geser Khan－Epos aus Amdo,’ *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach－ und Kulturwissenshaft Zentralasiens der Universität Bonn*, 11 288－299

Heissig, Walther(1980) *Geser rëdzia－wu*, Dominik Schröders nachgelassene Monguor (Tu－jen)－Version des Geser Epos aus Amdo, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

Loriner, D. L. R. (1935) *The Burushaski Language*, Vol. II Texts and Translations, Instituttet for sammenlignende kulturforsking, H. Aschenoug & Co. (W. Nygaard) Oslo.

Schröder, Dominik(1952) ’Einige Hochzeitslieder der Tujen,’ *Folklore Studies*, Supplement 1, Pekin, pp. 303－354

Schröder, Dominik(1959) *Aus der Volksdichtung der Monguor*, 1 Teil, Otto Harrossowitz, Wiesbaden.

Söhnen, Renate(1981) ‘On the Stak Version of the Kesar Epic in Baltistan (An annotated summery of the first chapter),’ *Zentralasiatische Studien der Seminars für Sprach－ und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 15, Kommissionsverlag Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 491－511

Tegüsbayar (1986) ‘ “Geser” taki baγ idegen ü motif un tuqai,’ *Öbür mongγol un yeke surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül*, 1986 on u 4 düger quγučaγa 70－82
（特古斯巴雅爾「論“格斯爾”中的Bak食物母題」『内蒙古大学学報　哲学社会科学蒙文版』一九八六年　第四期　70－82）

Wakamatsu Hirosi(1993) ‘ “Geser” kiged grek ün üliger,’ *Öbür mongγol un ündesten ü baγsi yin degedü surγaγuli yin erdem sinǰilgen ü sedgül* (gün uqaγan neyigem ün sinǰilekü uqaγan u mongγol keblel) 1993 on

u ebül ün quγučaγa (yerüngkei 43 duγar) 51－57
（若松寛「《格斯爾》与希臘神話」『内蒙古民族師院学報（哲学社会科学・蒙古文版』一九九三年冬季号（総第四十三期）51－57）
Yang Si (1987) 'Zum „Gesar" im Gebiet des Monguor(Tu)－Volkes,' *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach－ und Kulturwissenshaft Zentralasiens der Universität Bonn*, 20, 28－31

Дамдинсүрэн, Ц. (1956) Гэсэрийн туужийн гурван шинж, Улсын хэвлэл, Улаанбаатар
Дамдинсүрэн, Ц. (1985) Гэсэр, Монгол ардын аман зохиолын чуулган Ⅷ, БНМАУ－ын Шинжлэх Ухааны Академи хэл зохиолын хүрээлэн, Улсын хэвлэлийн газар, Улаанбаатар
Тенишев, Э. Р., Б. Х. Тодаева (1966) Язык желтых уйгуров, Издательство 《наука》 главная редакция восточной литературы, Москва
Тодаева, Б. Х. (1973) Монгорский язык, Издательство 《наука》 главная редакция восточной литературы, Москва

（1997. 9 .19　受理）